

和洋女大文家政 の酒井ノブ子
金蘭短大 篠原 冬

目的 今までの経過および目的は第1報の通りである。

方法 調査時期は54年2月～5月で、対象は埼玉県潮市の某幼稚園児の父母240組、和洋女大の自宅通学生の父母298組で、前報と同じ内容の質問紙を教師、学生を通して配布し、回収した。回収率は63.4%、有効率は92.4%で、315組を得た。

結果 前報と同様に、まず年齢別にみると、各層でいろいろの違いがみられたが、どの年齢層においても違っていたのは勤労意欲で、人より多く働きたいという人は男性に多く、人並で十分という人は女性に多く、この点では前報と同じ結果であった。

学歴別では、同じくそれぞれの学歴によって、いろいろの違いがみられたが、共通にみられた違いは、生きがいの対象で、仕事や勉強に生きがいを感じている人は男性に多く、子や孫の成長と答えた人は女性に多く、前報に似た結果がでていた。

職業別では、男性と女性の間には前報ほどの違いはみられず、くらし向きの実感と勤労意欲のみに有意差が認められたに過ぎなかった。くらし向きについては、男性の方が女性よりもきびしい捉え方をしており、また勤労意欲については、女性の方が稍弱いという結果がでていた。

以上を総合して男女差をみると、生きがいの対象、勤労意欲、勤勉は美徳という考え方、余暇の活用、余暇の評価の一部に有意差が認められた。

なお前報と総合してみると、くらし向きの実感、仕事の迷惘と勤勉についての考え方の一部、余暇の過ごし方の評価を除いては、すべての項目について有意差が認められた。